

第2章 地域活動

2-1 自治会(区)について

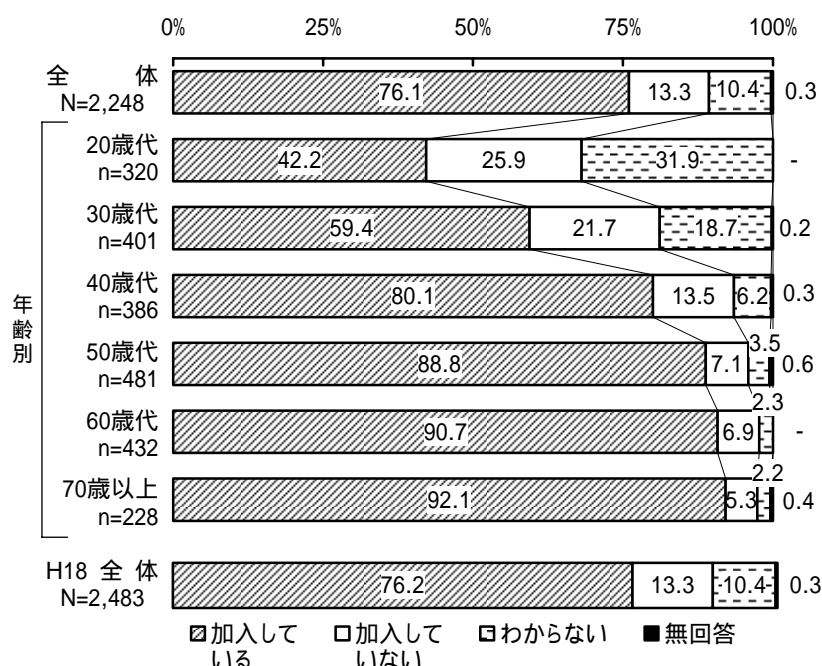
自治会(区)加入者は全体の約4分の3。

(1) 自治会(区)の加入状況

point

自治会(区)加入率は76.1%で、昨年(H18)とほぼ同じ。
40歳代以上になると加入率は8割を超えるが、30歳代以下になると「わからない」が増えている。

問5 あなたは、自治会(区)に加入していますか。(あてはまる番号に1つだけ印)

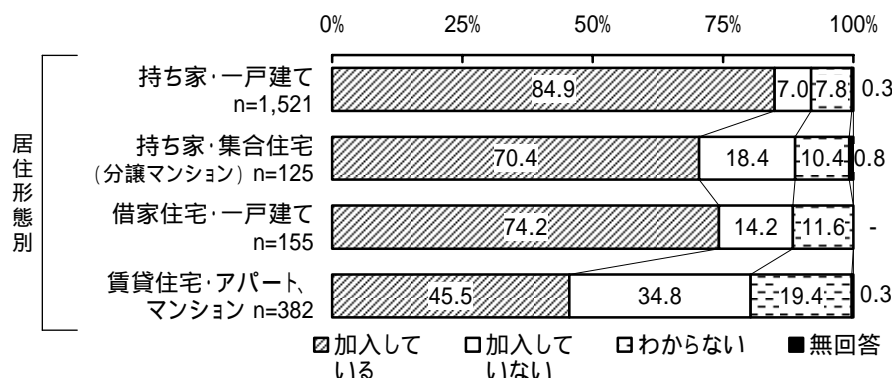


属性別
特徴

年齢別でみると、20歳代では「加入している」の割合(42.2%)が5割を下回っている。また、20歳代の約3割(31.9%)、30歳代でも約2割(18.7%)は、「わからない」と回答している。

ブロック別で見ると、「加入している」割合は南西部(83.0%)など周辺部で8割を超えるところが多いのに対し、中央部では70.0%とやや低くなっている。

図2-1 居住形態別みた自治会(区)の加入状況



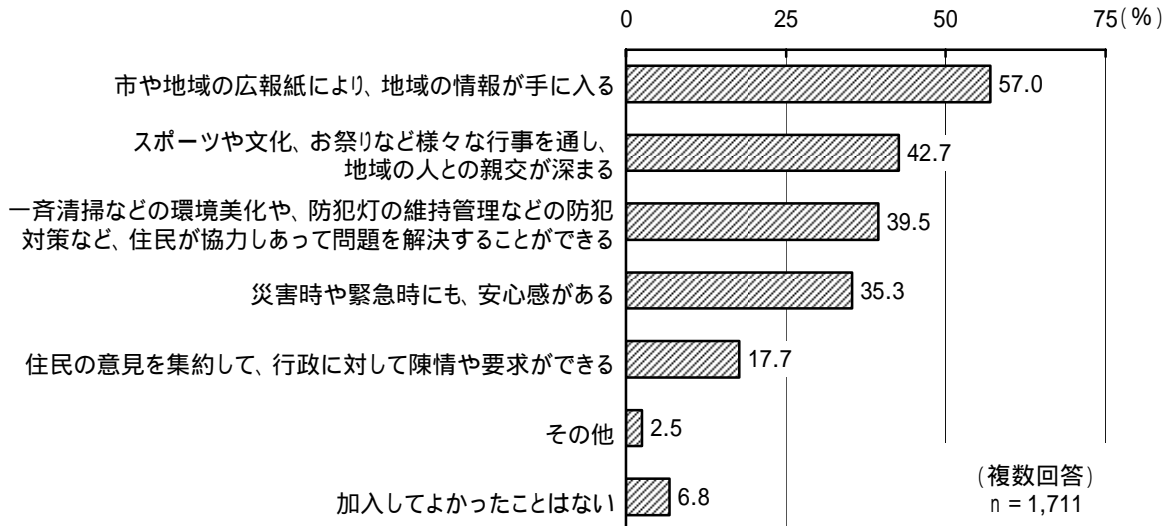
賃貸アパート・マンション居住者で自治会(区)に「加入している」割合は半数以下。

(2) 自治会(区)に加入してよかったこと

point

自治会(区)加入のメリットで最も多いのは「市や地域の広報紙により、地域の情報が手に入る」。
 「地域の情報」の割合は中央部などの集合住宅居住者で高く、その他の「地域の人との親交が深まる」や「住民が協力しあって問題解決」といった項目は西部や東部で高い。

付問1【問5で、「加入している」と答えた方に】自治会(区)に加入していて、よかったと思うことは何ですか。次の中から、あてはまるものをいくつでも選び、番号に印をつけてください。

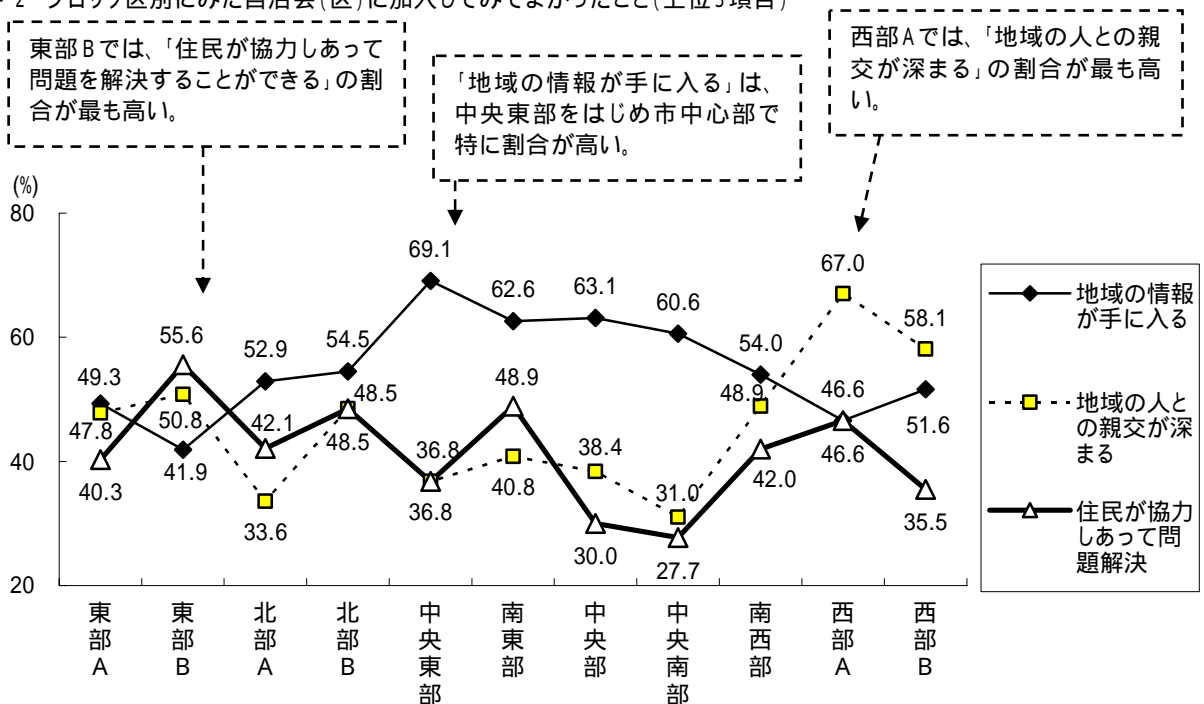


属性別特徴

性別でみると、「市や地域の広報紙により、地域の情報が手に入る」の割合は女性(61.6%)が男性(51.3%)を約10ポイント上回っている。

年齢別でみると、各項目とも若い年代よりも高齢層で比率が高くなっている。なかでも「住民の意見を集約して、行政に対して陳情や要求ができる」の割合は20歳代で5.9%であるのに対し、70歳以上では30.5%と3割を超えている。

図2-2 ブロック別に見た自治会(区)に加入してみてもよかったこと(上位3項目)

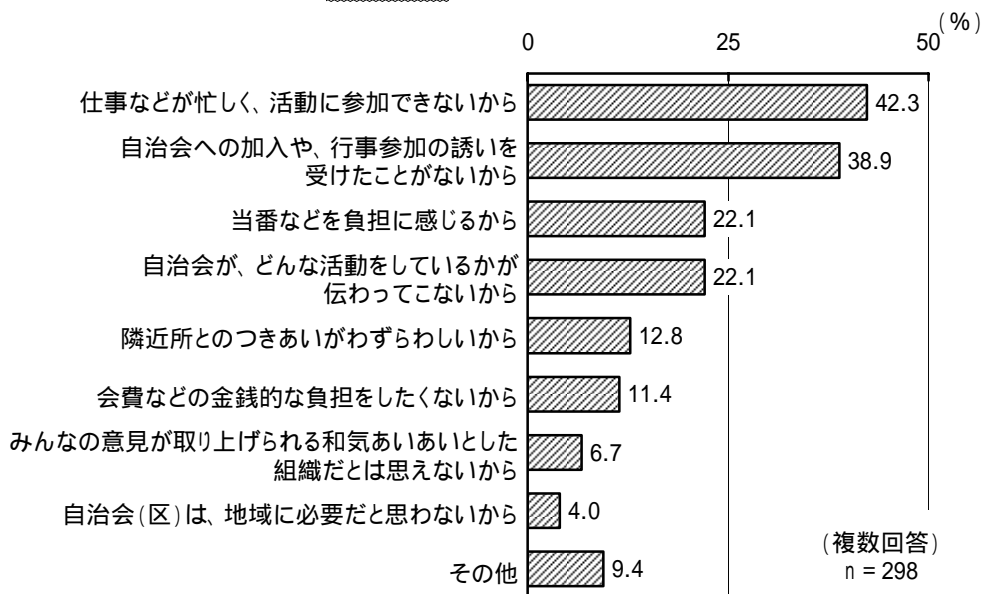


(3) 自治会(区)に加入していない理由

point

自治会(区)に加入していない理由は「忙しい」、「誘いを受けたことがない」がトップ2。

付問2【問5で、「加入していない」と答えた方に】自治会(区)に加入していない理由は何ですか。次の中から、あてはまるものをいくつでも選び、番号に 印をつけてください。

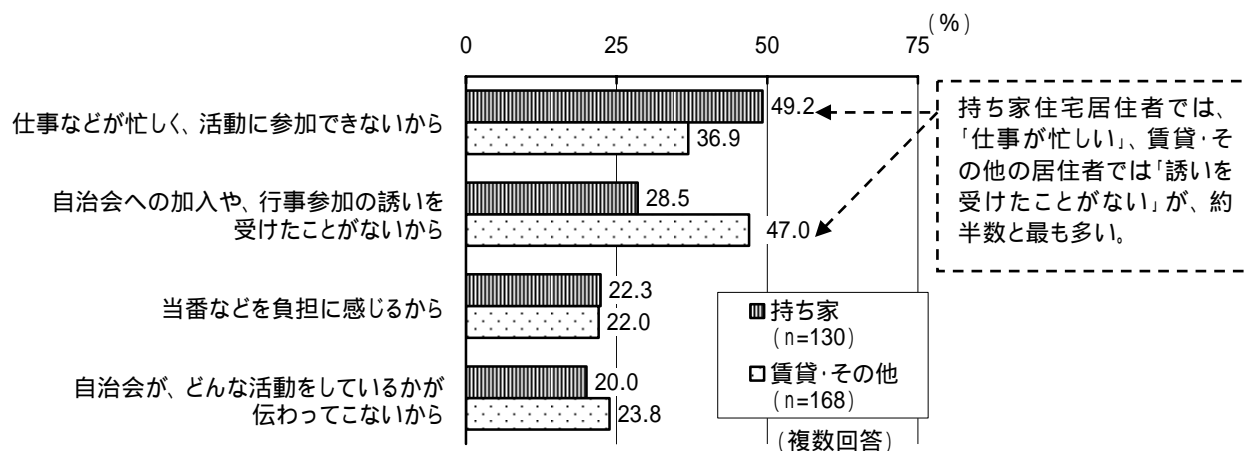


属性別
特徴

年齢別でみると、「仕事などが忙しく、活動に参加できないから」の割合は30～40歳代で5割を超えている。「どんな活動をしているかが伝わってこないから」は20歳代で32.5%と3割を超えている。

旧久留米市地域では、「誘いを受けたことがないから」が43.1%、旧4町地域では「仕事などが忙しく、活動に参加できないから」が52.5%と、最も割合が高くなっている。

図2-3 持ち家・賃貸別に見た自治会(区)に加入していない理由(上位4項目)



(4) 今後、自治会(区)に加入したいと思うか

point

自治会(区)未加入者のうち、約3割(31.5%)が今後の加入の意思をもっている。

付問3【問5で、「加入していない」と答えた方に】あなたは今後、自治会(区)に加入したいと思いますか。(あてはまる番号に1つだけ 印)

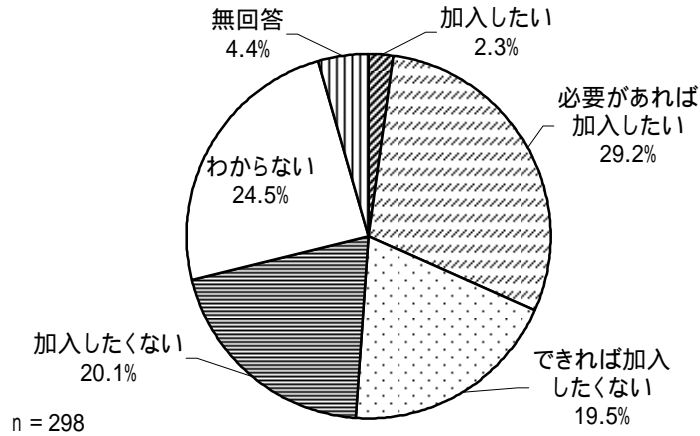
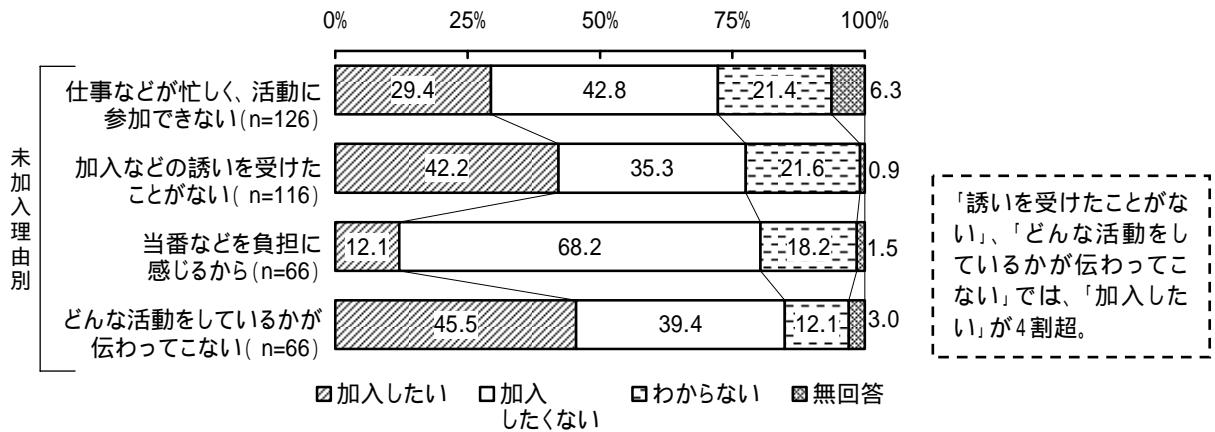


図2 - 4 自治会(区)に加入していない理由(上位4項目)別にみた今後の加入意思



「誘いを受けたことがない」、「どんな活動をしているかが伝わってこない」では、「加入したい」が4割超。

「加入したい」は「加入したい」+「必要があれば加入したい」の計。
 「加入したくない」は「できれば加入したくない」+「加入したくない」の計。

2 - 2 地域とのかかわりの程度について

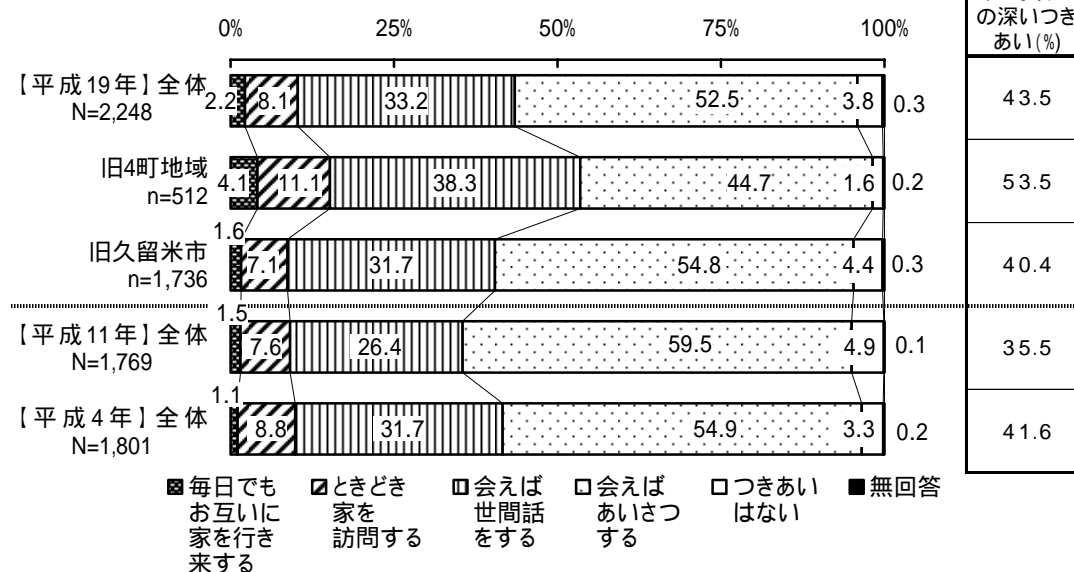
年齢によってかかわり方に大きな差がある

(1) 近所づきあいの程度

point

近所づきあいの程度は、年齢が高くなるにつれ深くなる傾向がはっきり出ている。
 旧市よりも旧4町地域の方がより近所づきあいの程度は強い。
 過去の調査結果と比較すると、「世間話をする」以上の深いつきあいをする割合はやや持ち直しているが、若年層で深いつきあいをする割合が低いという傾向は変わっていない。

問4 あなたは、近所づきあいをどの程度されていますか。
 (あてはまる番号に1つだけ 印)



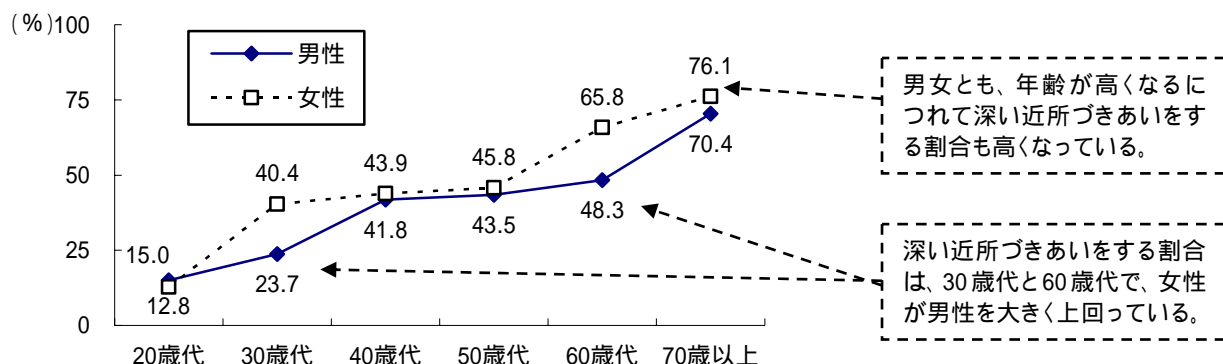
平成11年、4年調査の調査範囲は旧久留米市地域のみ

属性別特徴

年齢別でみると、20歳代では「つきあいはない」が1割弱(9.4%)で、「世間話をする」以上の深いつきあいをしている割合は13.8%にとどまっている。

ブロック別に「世間話をする」以上の深いつきあいをしている割合をみると、東部Bでは61.2%と6割に達するのに対し、中央南部(34.9%)、北部(36.2%)、中央東部(38.0%)では3割台にとどまっている。

図2-5 性×年齢別にみた「世間話をする」以上の深いつきあいをしている割合



男女とも、年齢が高くなるにつれて深い近所づきあいをしている割合も高くなっている。

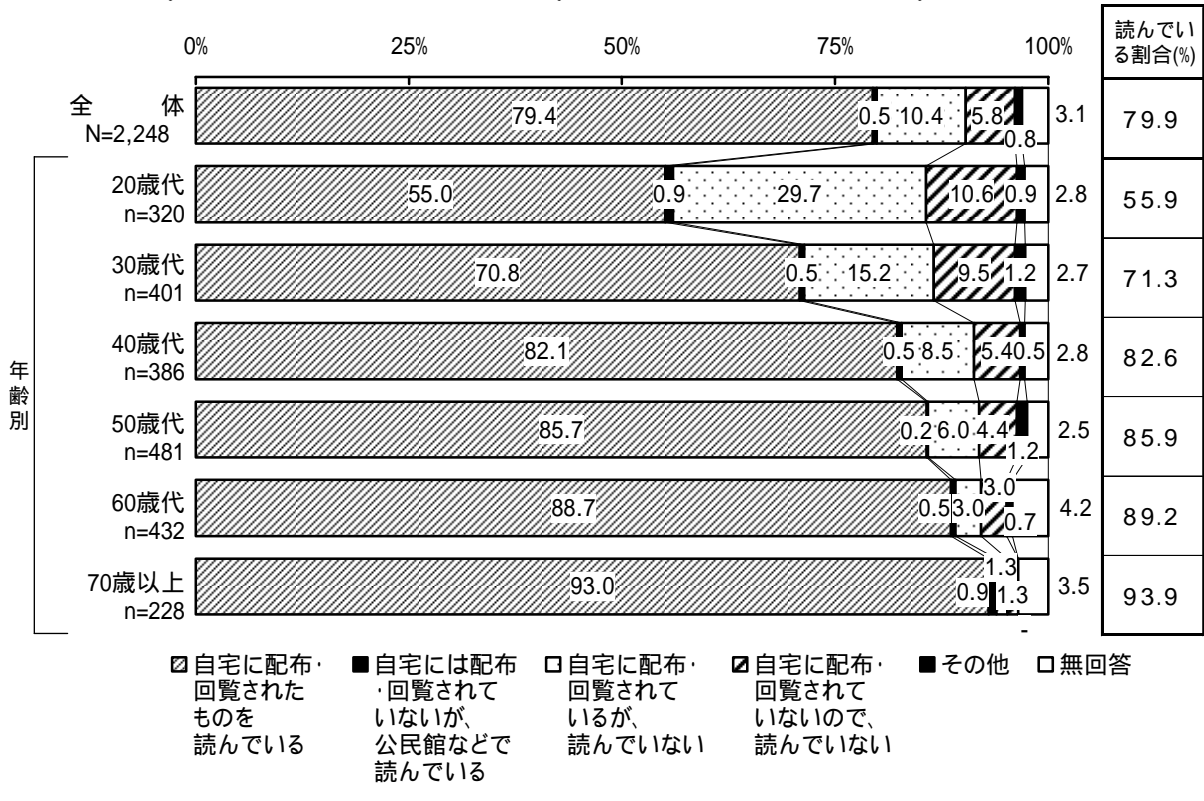
深い近所づきあいをしている割合は、30歳代と60歳代で、女性が男性を大きく上回っている。

(2) 地域の配布物や回覧板の閲覧状況

point

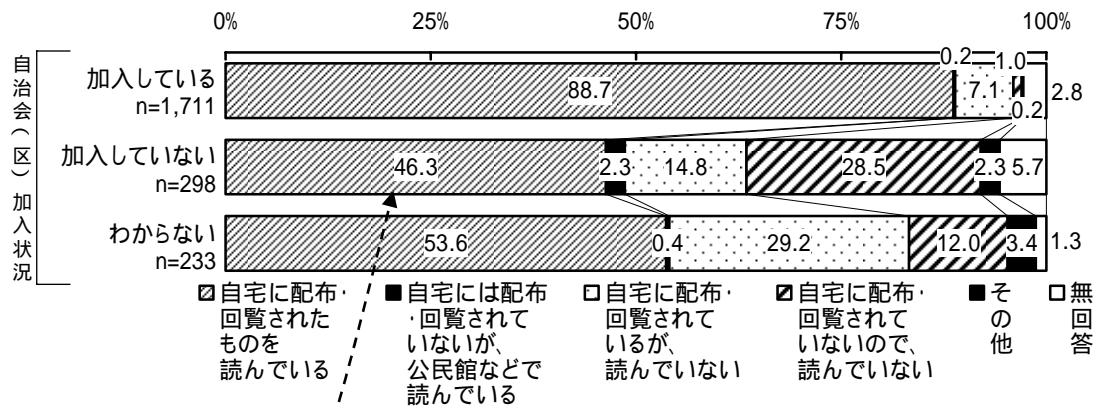
地域の配布物や回覧板の閲覧率は、全体では 79.9%と約 8 割に達している。
70 歳以上では閲覧率が 9 割を超えるのに対し、20 歳代では約 4 割が配布物を見ていない。
自治会（区）に加入していない人の配布物閲覧率は 48.6%と、5 割を下回っている。

問 6 あなたは、ふだん「地域の行事案内」などの配布物（「広報くめ」など、市が発行する情報紙は除きます）や回覧板に目を通していますか。（あてはまる番号に 1 つだけ 印）



属性別特徴
性別で見ると、自宅に配布・回覧されたものや公民館にあるものを『読んでいる』割合は、女性が 83.2%であるのに対し、男性は 75.9%にとどまっている。
ブロック別で見ると、『読んでいない』割合は西部 A では 9.2%と 1 割を切るのに対し、北部 A では 24.5%と 2 割を超える。

図 2 - 6 自治会(区)の加入状況別に見た、地域の配布物回覧板の閲覧状況



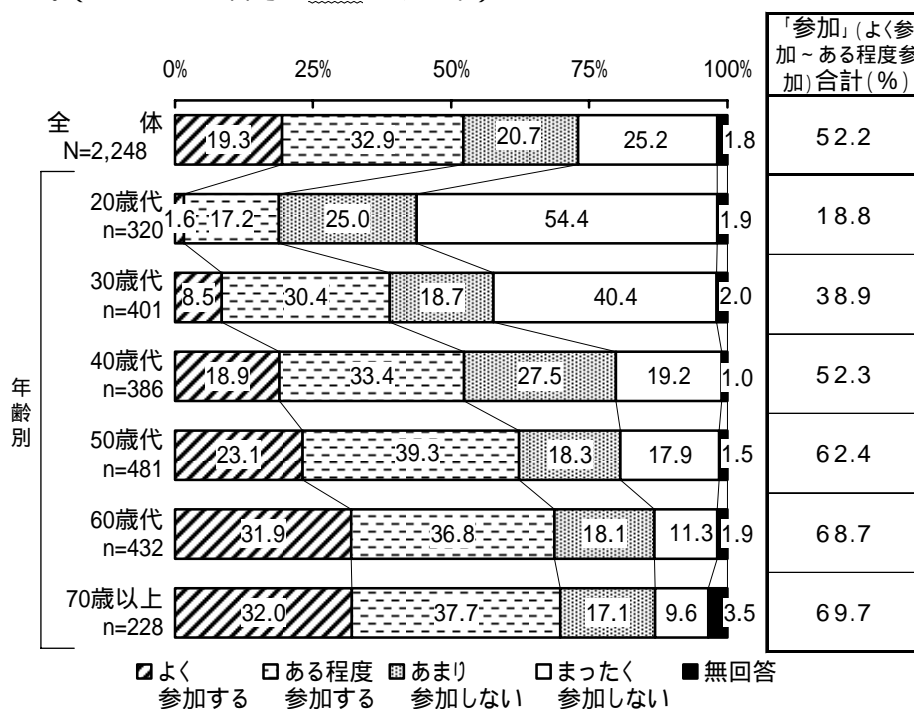
自治会(区)に加入していない場合、地域の配布物や回覧板の閲覧率は半数以下である。

(3) 地域で行われる活動への参加状況

point

地域で行われる活動について、「よく参加する」と「ある程度参加する」を合計した「参加」の割合は、全体では5割を超える。ただし、若年層の参加率の低さがめだつ。

問7 あなたは、自治会(区)など地域で行われる活動(運動会、清掃活動など)に、どの程度参加されていますか。(あてはまる番号に1つだけ印)



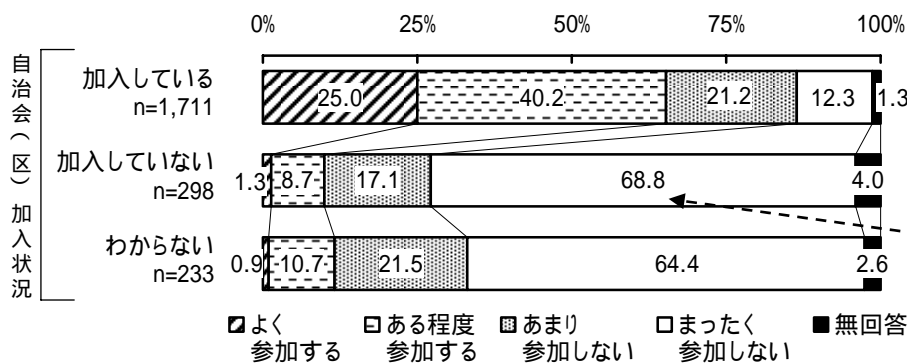
属性別特徴

自治会(区)などの地域活動への参加状況を性別で見たと、特に大きな差は見られない。

年齢別で見ると、20歳代では「まったく参加しない」が54.4%と半数を超え、30歳代でも4割(40.4%)に達する。「参加」している割合は、60歳代(68.7%)、70歳以上(69.7%)で7割弱まで上がっている。

ブロック別で見ると、「よく参加する」は西部A(35.2%)、東部B(34.2%)、東部A(33.7%)で3割を超えている。一方、「まったく参加しない」は中央部・中央東部・中央南部・北部Aでそれぞれ3割を超えている。

図2-7 自治会(区)の加入状況別に見た、自治会(区)などの地域活動への参加状況



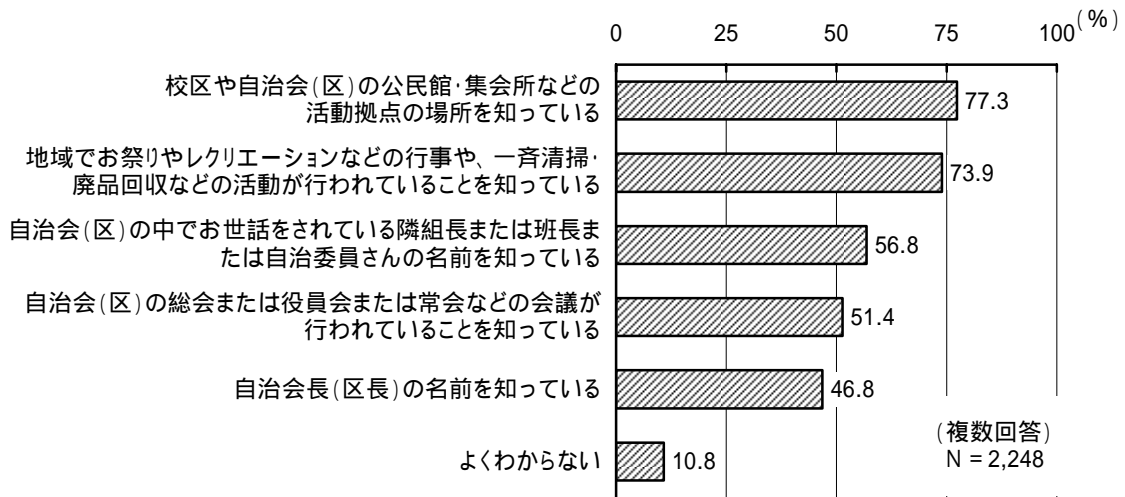
自治会(区)に加入していない場合、地域活動に「まったく参加しない」割合が7割弱に達している。

(4) 地域活動に関することの認知状況

point

「公民館・集会所の場所」や「お祭りなどの活動」に対する認知率は7割を超える。自治会(区)に加入していない場合では、「よくわからない」が約4割を占めている。

問8 あなたがお住まいの地域のことについて、次のことをご存じですか。あてはまるものをいくつでも選び、番号に印をつけてください。



属性別特徴

性別で見ると、「隣組長または班長または自治委員さんの名前を知っている」という割合は男性(52.1%)より女性(60.6%)の方が、「自治会(区)の総会または役員会または常会などの会議が行われていることを知っている」についても男性(47.9%)より女性(54.3%)の方が、それぞれ高くなっている。

年齢別で見ると、年齢が下がるごとに各項目の認知率は下がっており、特に自治会(区)の具体的内容についての20歳代の認知率はいずれも1割台となっている。

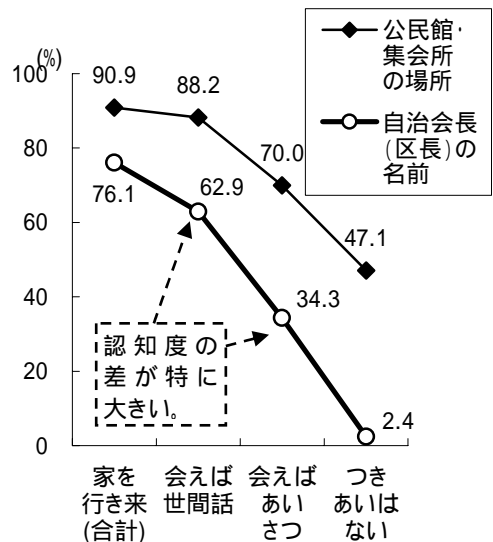
ブロック別で見ると、割合の高い3項目はいずれも中央部で最も低い。「公民館・集会所の場所」は68.6%と唯一6割台にとどまっており、「お祭りなどの活動」(62.4%)、「隣組長・班長・自治委員の名前」(44.5%)はいずれも全体平均と比べ10ポイント以上低くなっている。

表2-1 自治会(区)加入状況別にみた地域活動に関することの認知状況 (%)

	標本数	問8. 知っている地域情報(M)						よくわからない
		公民館・集会所	お祭りなどの活動	隣組長・班長・自治委員	自治会(区)の会議	自治会(区)の会長	よくわからない	
全体	2,248	77.3	73.9	56.8	51.4	46.8	10.8	
加入している	1,711	86.4	84.6	70.8	63.8	58.1	2.6	
加入していない	298	48.7	34.2	12.1	10.7	12.8	39.9	
わからない	233	47.6	46.8	11.2	13.3	8.2	34.3	

主要メンバーの名前や会議の実施など具体的な自治会(区)の内容に関する項目について、自治会(区)に加入している場合はいずれも認知率は半数を超えるのに対し、加入していない場合はいずれも認知率1割台となっている。

図2-8 近所づきあいの程度別にみた「公民館・集会所の場所」と「自治会長(区長)の名前」の認知状況

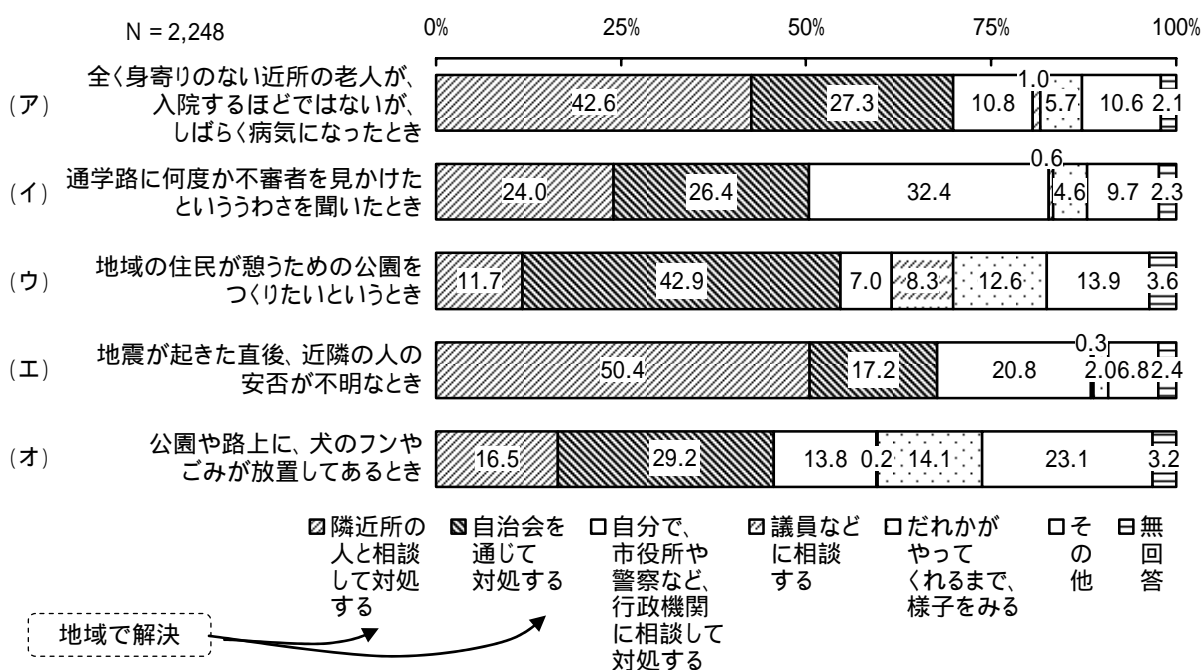


(5) 地域問題の解決方法

point

「近所の老人が病気になったとき」、「災害時の安否確認」では、「隣近所の人と相談して」や「自治会を通じて対処」といった“地域の問題は地域の中で解決”という人が約7割。「公園や路上の犬のフンやごみ」については、「様子を見る」という傍観派が14.1%。

問9 もし、仮にあなたがお住まいの地域に次のような問題が起こったとしたら、あなたなら、どのような解決方法をとりますか。それぞれの問題に最もふさわしいと思われる解決方法を、次の項目ごとに1つずつ選び、番号に印をつけてください。



属性別特徴

年齢別でみると、(イ)「通学路に不審者を見かけたといううわさを聞いたとき」では、50歳以上で「自治会を通じて対処」(50歳代32.2%、60歳代35.2%、70歳以上38.2%)が最も高くなっている。また(オ)「犬のフンやごみが放置してあるとき」では、20歳代で「様子を見る」が25.0%と最も高い割合を占めている。

ブロック別でみると、(ウ)「公園を作りたとき」において、「自治会を通じて対処する」という割合が東部B(55.3%)、東部A(52.1%)、南西部(50.5%)で5割を超えている。また、各項目とも“地域の問題は地域の中で解決”という割合は中央部で最も低くなっている。

図2-9 (ア) 全く身寄りのない近所の老人が、入院するほどではないが、しばらく病気になったとき(平成4年比較)

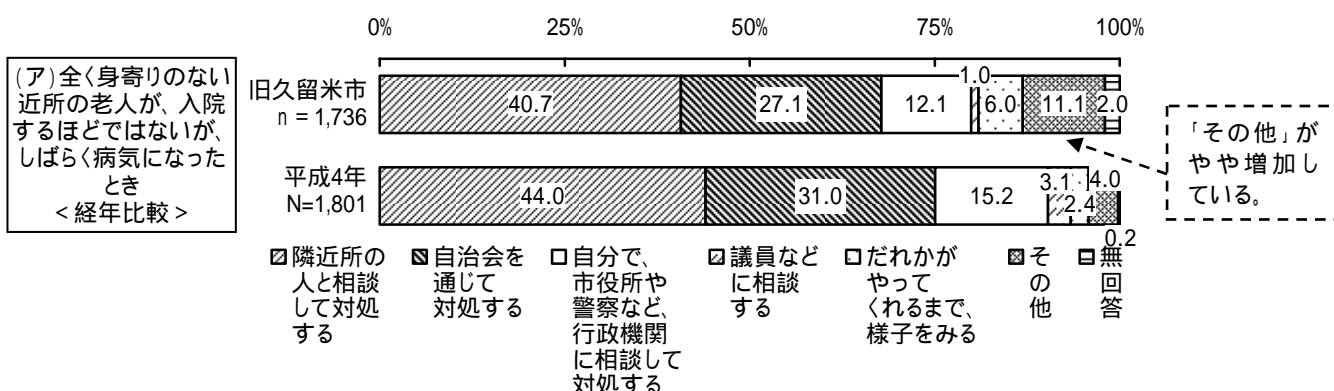
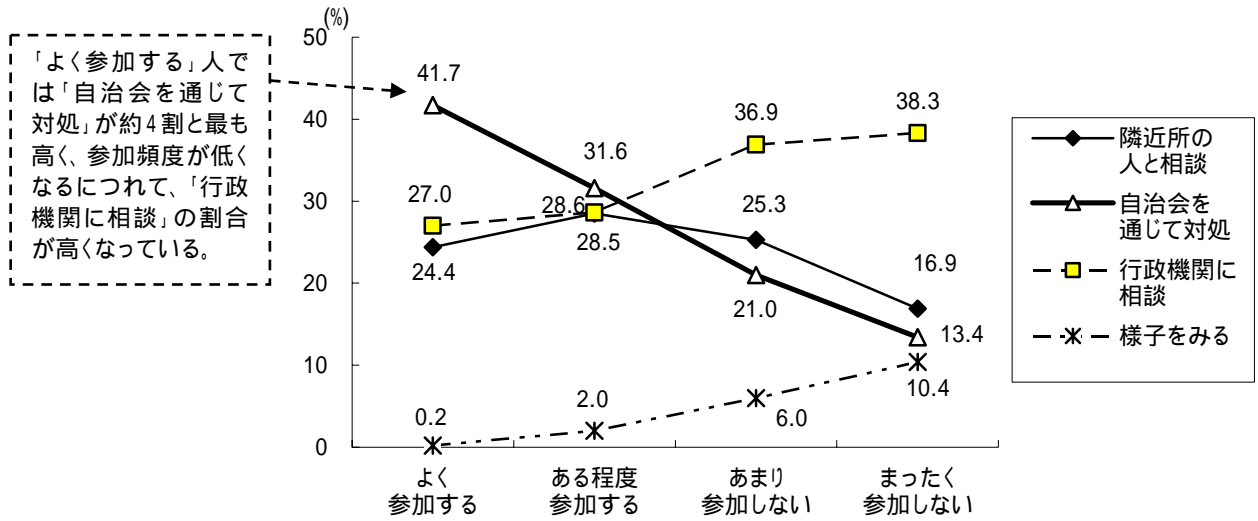
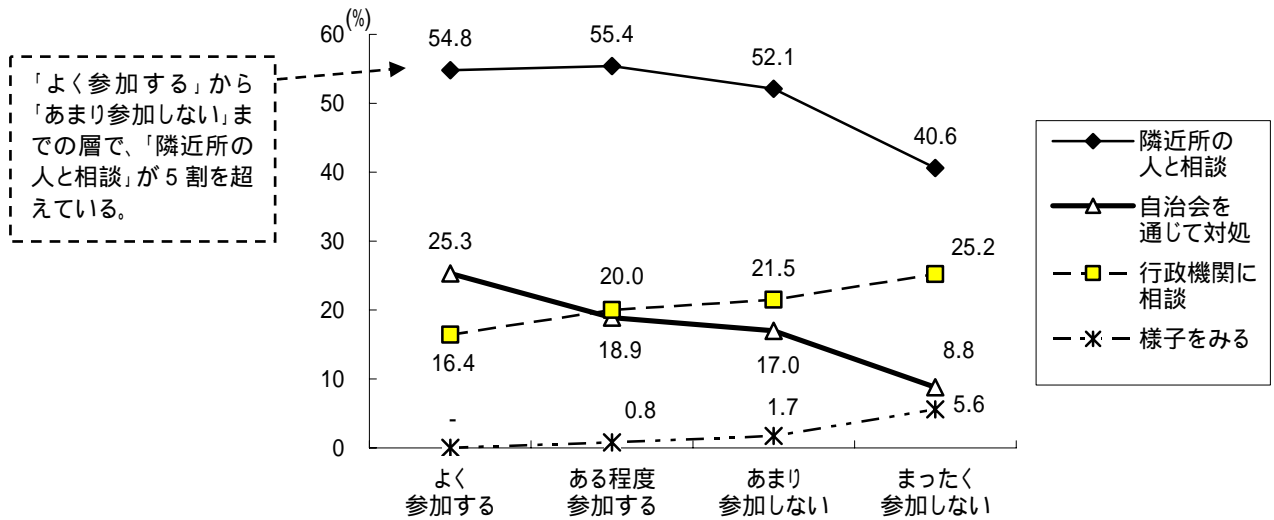


図2 - 10 地域活動への参加状況別にみた地域問題の解決方法(上位4項目)

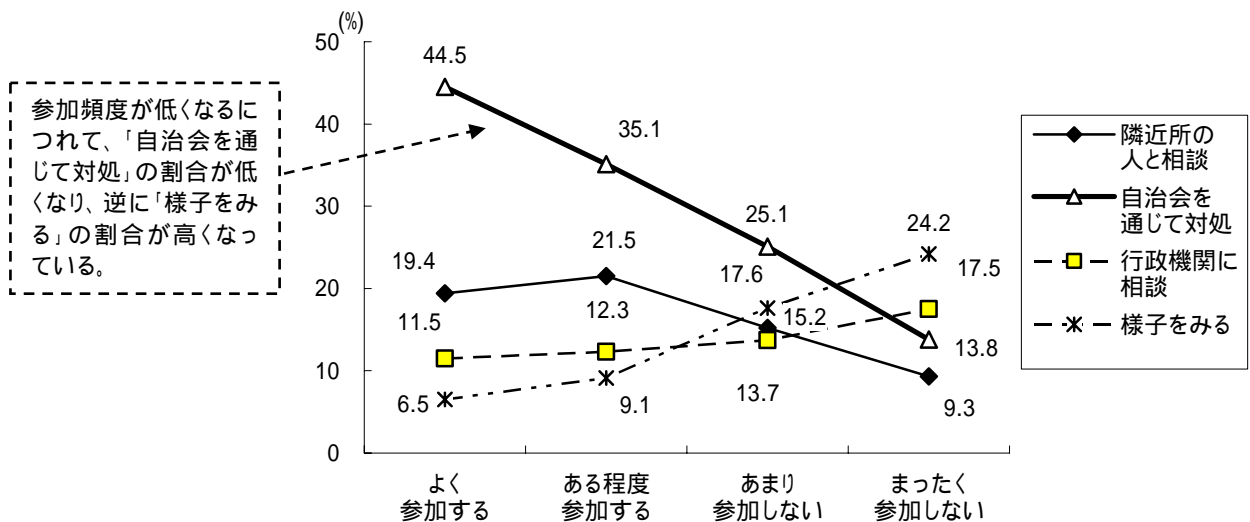
(イ) 通学路に何度か不審者を見かけたというわさを聞いたとき



(エ) 地震が起きた直後、近隣の人々の安否が不明なとき



(オ) 公園や路上に、犬のフンやごみが放置してあるとき



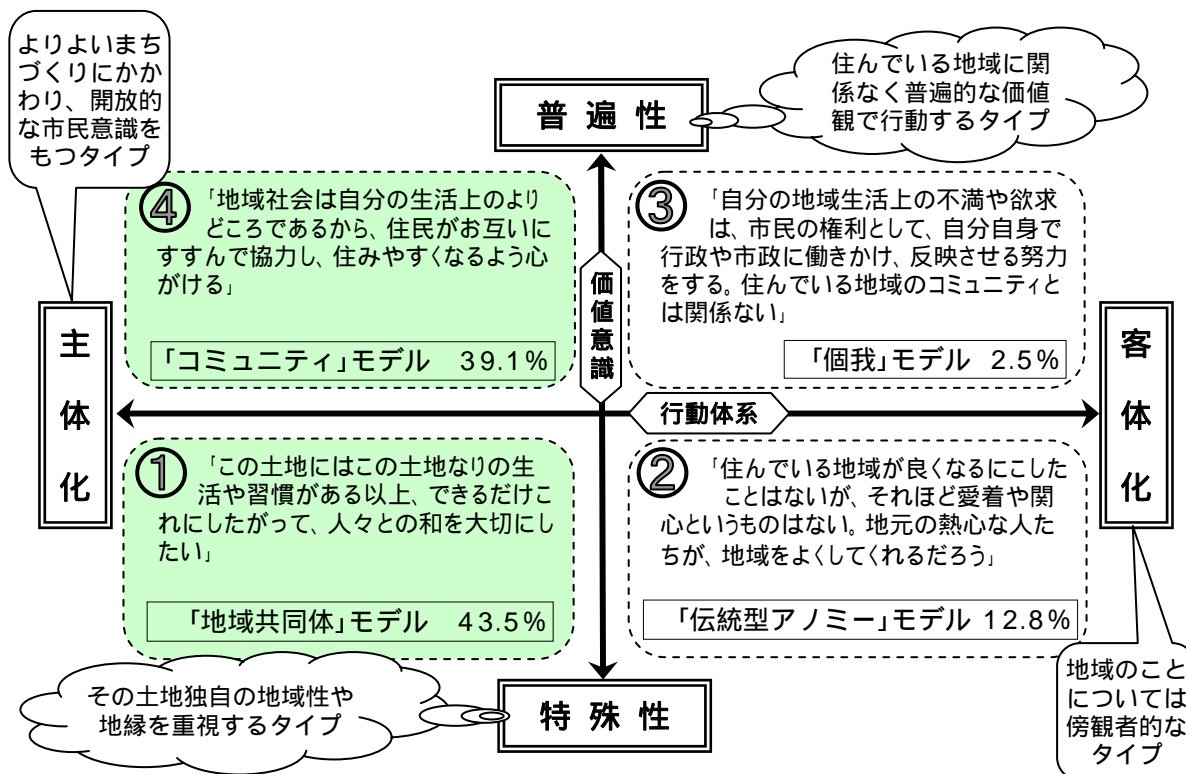
(6) 地域生活についての考え方

point

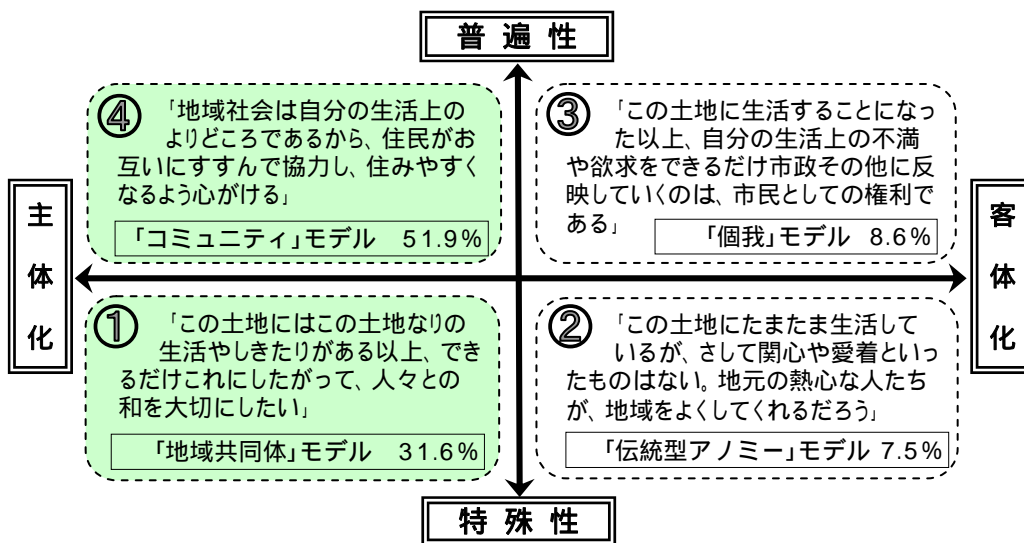
地域生活について、「自分から主体的にかかわろう」とするタイプが8割を超えている。

問10 地域生活について、次の4つの考え方があります。この中で、あなたの考え方に最も近いものを1つ選び、番号に印をつけてください。

コミュニティ意識のタイプ



参考 地域活動への参加状況別にみた地域生活についての考え方 (平成4年)



今回、平成4年調査時とは選択肢内容の一部を変更している(太字は今回の選択肢と異なる部分)

図 2 - 11 年齢別にみた地域生活についての考え方

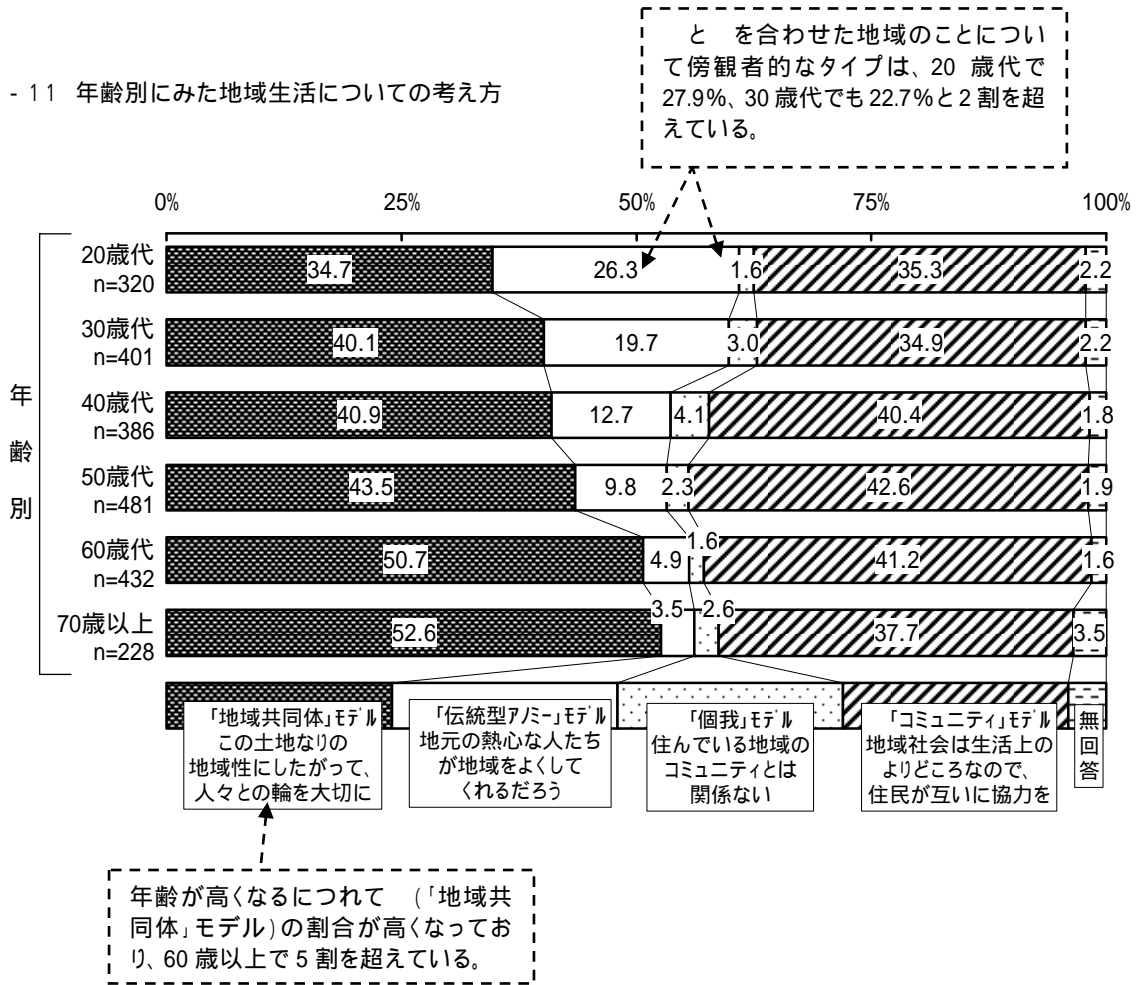
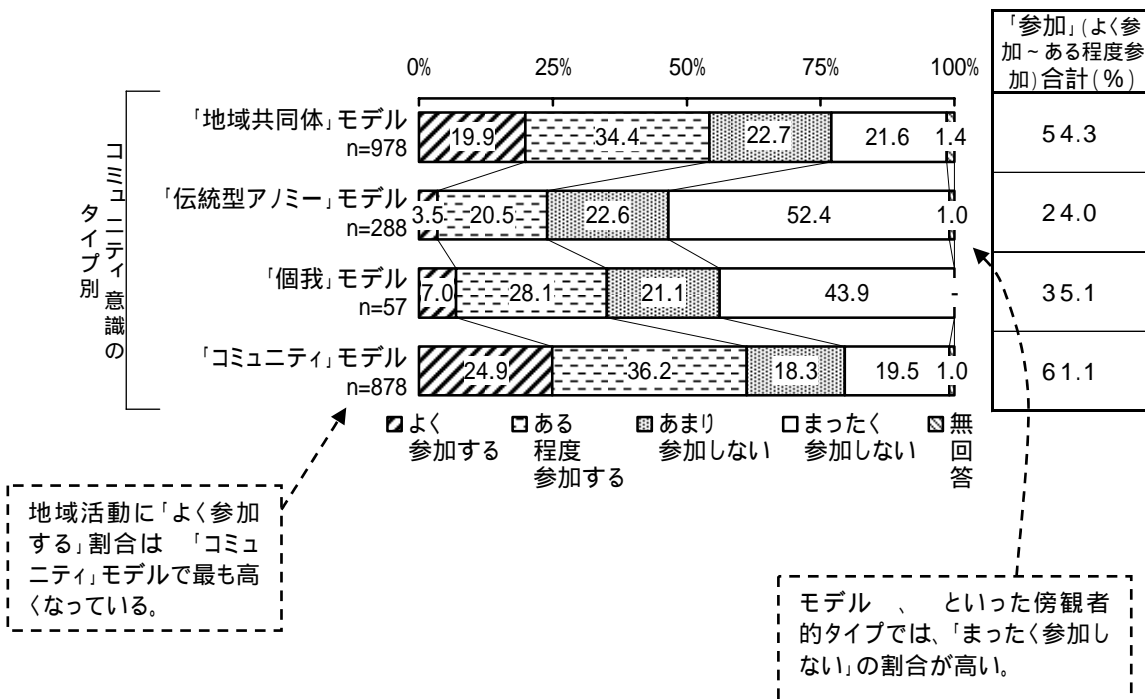


図 2 - 12 コミュニティ意識のタイプ別にみた地域活動への参加状況



2 - 3 地域活動について

今後力を入れるべき活動第一位は「防犯活動」。だが現時点での参加状況・参加意向は2割に満たず。

(1) 地域活動への参加状況と今後の意向・力を入れるべき活動

point

参加したことがある活動では、「美しい景観づくり」、「環境保護活動」が上位に。
 今後、参加してみたい活動では、「生涯学習活動」や「健康づくり活動」など、『生きがいにかかわる活動』が人気を集めている。
 今後力を入れるべき活動ベスト3は「防犯活動」、「青少年の健全育成活動」、「福祉活動」。
 だがこれらは“参加したことがある”“参加してみたい”活動ベスト3には入っていない。

問11 あなたがお住まいの地域での活動についておたずねします。(あてはまる番号にいくつでも 印)

(ア) 次のうち、あなたが、この1年間に、参加したことがある地域活動は、何ですか。

(イ) あなたは、今後どのような地域活動に参加してみたいと思いますか。

(ア)で「参加したことがある」活動も含まず

(ウ) あなたは、お住まいの地域では、今後どのような活動に力を入れるべきだと思いますか。

(ア)参加したことがある		(イ)今後、参加してみたい		(ウ)今後、力を入れるべき	
第1位	道路や河川の美化・花づくりなどによる美しい景観づくり 32.7	生涯学習活動 29.9	防犯活動 40.6		
第2位	廃品回収やリサイクルを進める環境保護活動 29.8	健康づくり活動 23.1	青少年の健全育成活動 37.3		
第3位	レクリエーションなどを通じて住民の親睦を深める活動 20.7	美しい景観づくり 16.6	福祉活動 37.3		
第4位	スポーツイベントやサークルを通じた健康づくり活動 20.1	住民の親睦を深める活動 16.3	子育て支援活動 30.5		
第5位	子ども見守りなど、青少年の健全育成のための活動 17.4	青少年の健全育成活動 15.6	市(行政)へ要望する活動 29.8		
第6位	防犯パトロールなどの防犯活動 16.4	福祉活動 15.6	防災活動 26.2		
第7位	教養や趣味サークルなどの生涯学習活動 11.3	環境保護活動 11.8	環境保護活動 25.4		
第8位	伝統行事や伝統的建物を保存する活動 8.0	防犯活動 11.5	美しい景観づくり 22.6		
第9位	「自治会だより」の発行など地域の広報活動 7.5	伝統を保存する活動 11.2	伝統を保存する活動 20.6		
第10位	初期消火訓練や防災マップ作成などの防災活動 6.9	子育て支援活動 10.9	生涯学習活動 16.9		
第11位	高齢者や障がい者などに対する福祉活動 6.5	防災活動 10.8	地域の広報活動 16.2		
第12位	育児相談などの子育て支援活動 4.0	市(行政)へ要望する活動 8.3	健康づくり活動 15.7		
第13位	住民の不満などを調べ、市(行政)へ要望する活動 2.1	地域の広報活動 6.9	住民の親睦を深める活動 13.7		

属性別特徴

(ア)参加したことがある活動をブロック別で見ると、「美しい景観づくり」は東部A(52.1%)、北部B(48.8%)で5割前後の割合があるのに対し、中央南部では12.6%にとどまっている。同様に「環境保護活動」でも、西部Aが48.1%、東部Bが47.4%であるのに対し、中央南部では19.8%、中央部で20.0%となっている。

これに対し、(イ)今後、参加してみたい地域活動についてはブロック別で大きな差が見られる項目は少ない。その中で「防犯活動」は東部A(16.6%)や北部B(16.5%)で、「伝統を保存する活動」は北部B(17.3%)で、それぞれ他のブロックより比較的割合が高くなっている。

(ウ)今後、力を入れるべき地域活動については、「市(行政)へ要望する活動」が西部B(40.8%)で高くなっている。

図 2 - 13 地域活動の参加状況別に見た「参加したことがある」、「今後、参加してみたい」地域活動(上位6位)

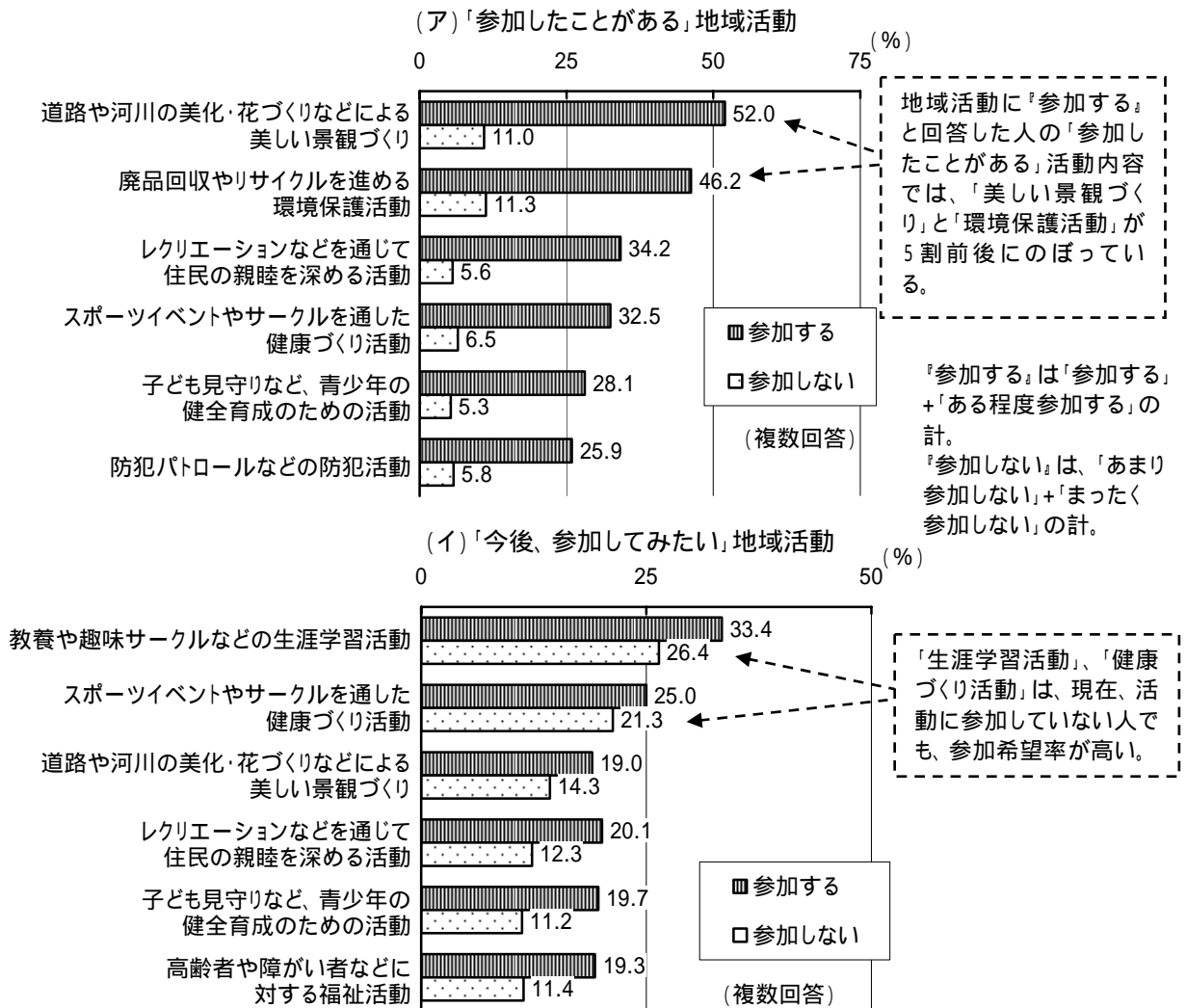
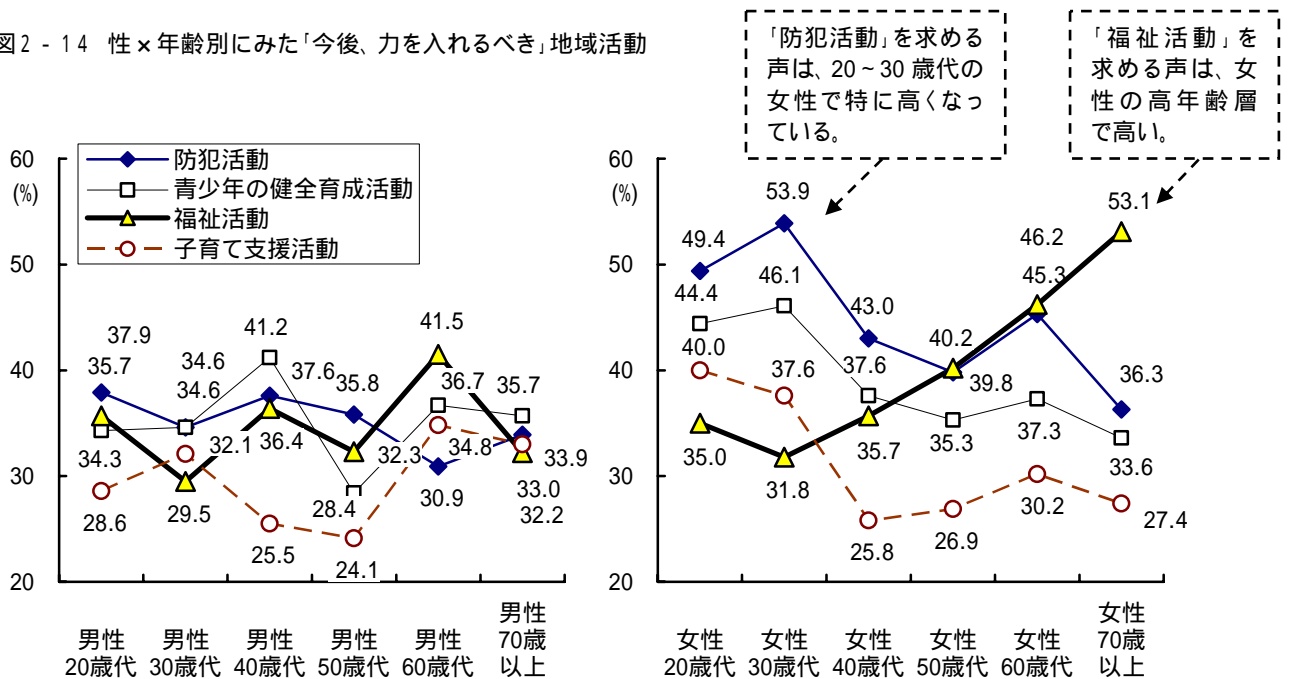


図 2 - 14 性×年齢別に見た「今後、力を入れるべき」地域活動

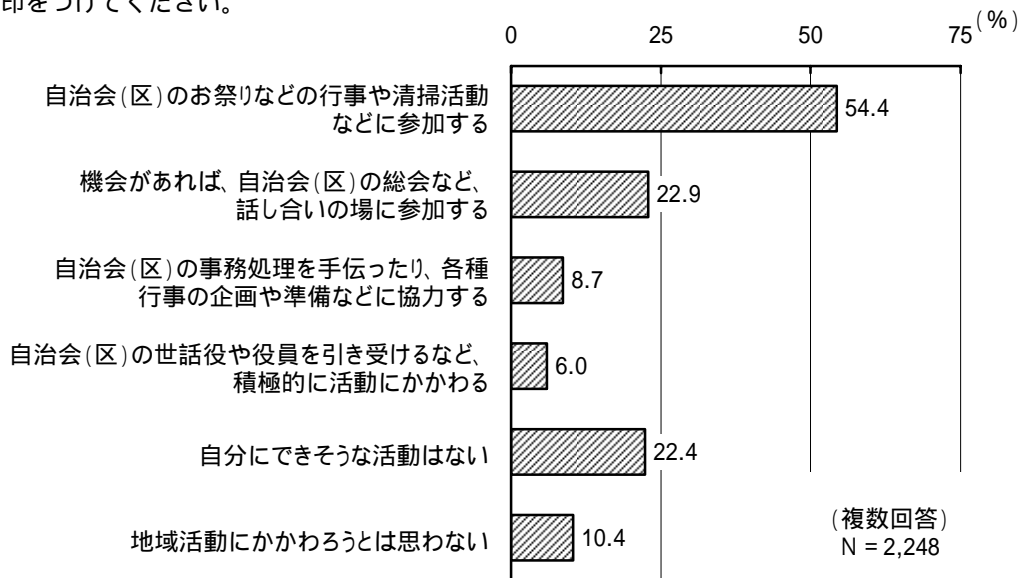


(2) これからの地域活動へのかかわり方

point

地域の行事などに参加するという人の割合は 54.4%。「機会があれば話し合いの場に参加する」についても、男性 50 歳代以上では 3 割を超える割合がある。

問 12 地域活動のかかわり方の程度についてお聞きします。あなたは、今後どのような形で地域活動にかかわりたいと思いますか。次のうち、あなたがやってもいいと思うものをいくつでも選び、番号に印をつけてください。



属性別特徴

性別でみると、「話し合いの場に参加する」の割合は女性(18.7%)と比べ男性(28.0%)の割合が高い。一方「自分にできそうな活動はない」では、男性は 19.6%なのに対し、女性は 24.7%となっている。

年齢別でみると、「自分にできそうな活動はない」の割合は 20 歳代(30.3%)で 3 割を超える。また「地域活動にかかわろうとは思わない」が 1 割を超えるのは 20 歳代(15.6%)と 30 歳代(14.7%)である。

ブロック別でみると、「お祭りなどの行事参加」については北部 B(65.4%)や西部 A(64.8%)で特に高いのに対し、中央南部(43.4%)と中央部(46.9%)では 4 割台にとどまっている。その北部 B と西部 A では、「自分にできそうな活動はない」の割合はともに 15.7%で最も低くなっているのに対し、中央部では 28.3%と 3 割弱に達している。

図 2 - 15 自治会(区)加入状況別に見た、これからの地域活動へのかかわり方

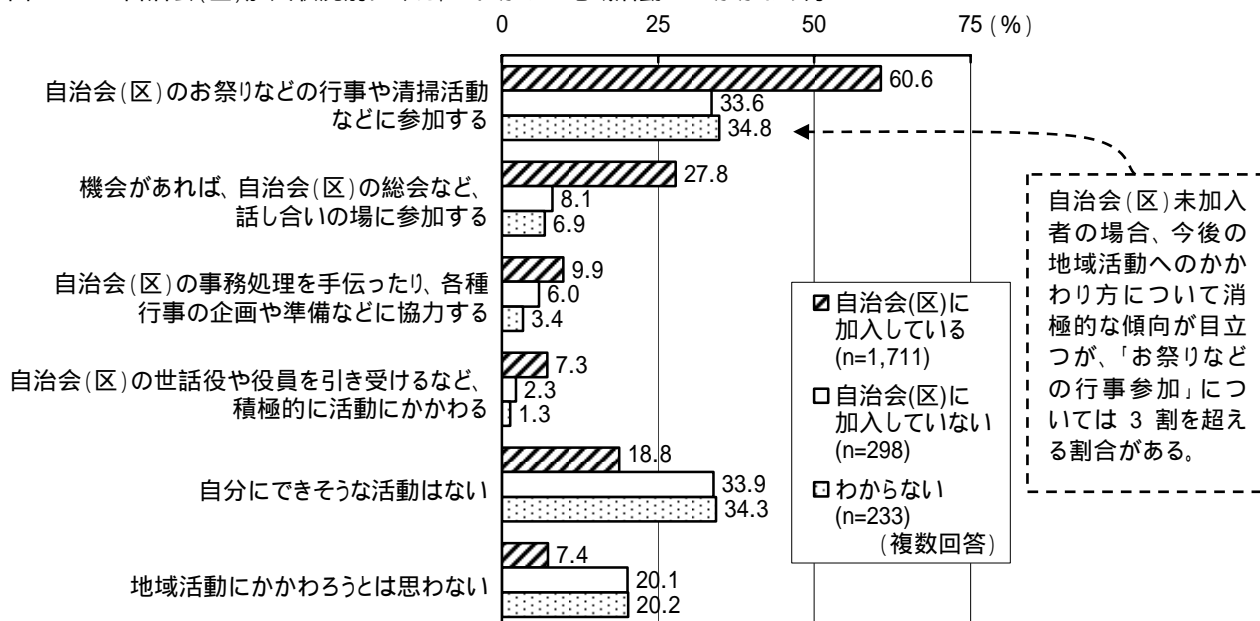
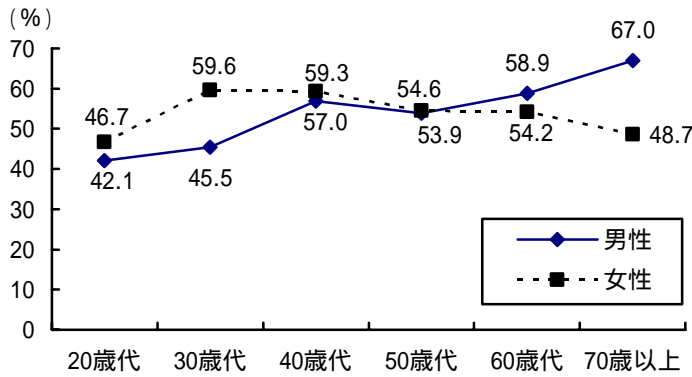


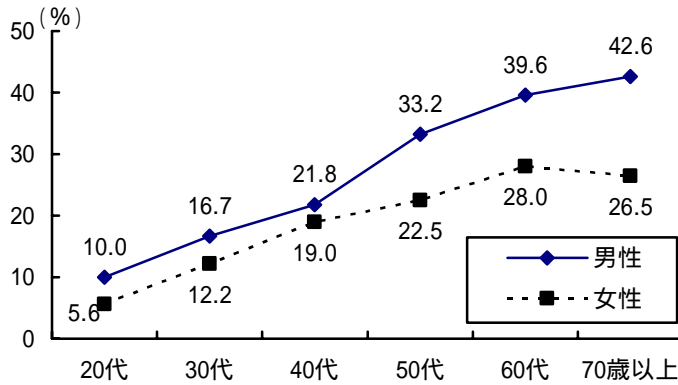
図 2 - 16 性×年齢別にみたこれからの地域活動へのかかわり方

「自治会(区)のお祭りなどの行事や清掃活動などに参加する」



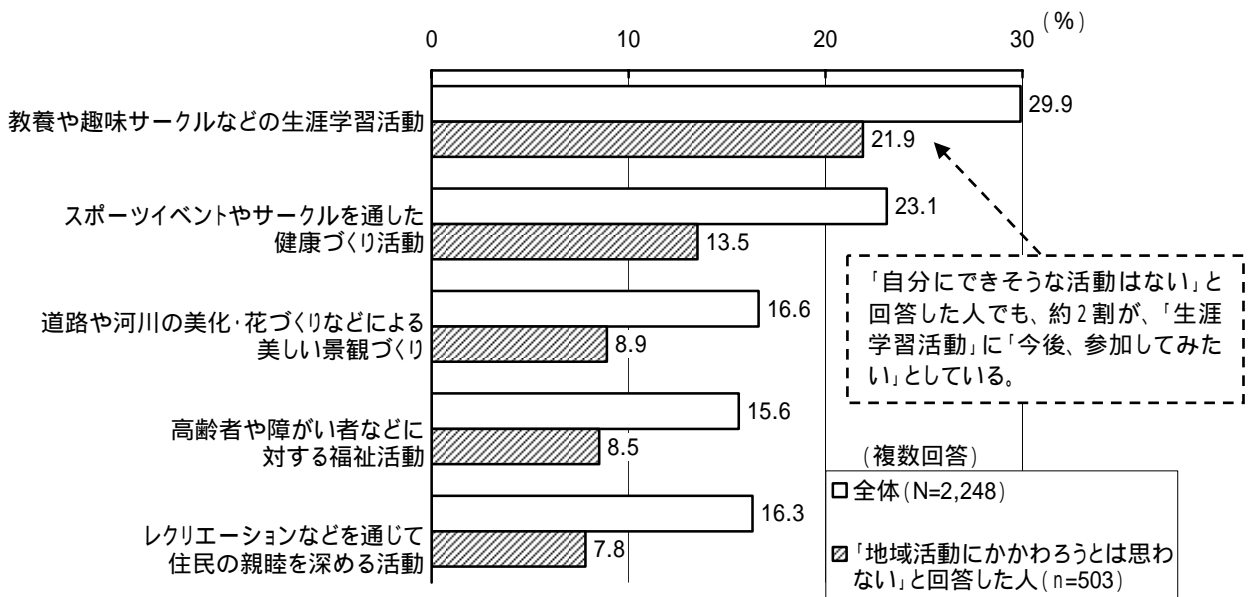
「お祭りなどの行事参加」では、40歳代までは女性の割合が高く、60歳代以上では、男性の割合の方が高い。

「機会があれば、自治会(区)の総会など、話し合いの場に参加する」



「話し合いの場に参加する」では、年齢層が高くなるにつれて割合も高くなっており、特に男性の50歳代以上では3割を超えている。

図 2 - 17 「自分にできそうな活動はない」と回答した人の、「今後参加してみたい」地域活動





地域活動について

自治会の活性化には「近隣関係」のあり方が少なからず関連している

自治会への加入状況は、「加入している」76.1%、「加入していない」13.3%、「わからない」10.4%となっている。「加入している」割合を、住居形態別でみると、

属性別にみた自治会(区)への加入状況				(%)					
		加入	未加入	わからない					
住居形態別	持ち家・一戸建て	84.9	7.0	7.8	性別×年齢	男性:20歳代	42.9	27.1	30.0
	持ち家・集合住宅(分譲マンション)	70.4	18.4	10.4		男性:30歳代	51.3	26.3	22.4
	借家住宅・一戸建て	74.2	14.2	11.6		男性:40歳代	75.2	16.4	8.5
	賃貸住宅・アパート、マンション	45.5	34.8	19.4		男性:50歳代	90.1	7.8	2.2
						男性:60歳代	89.9	7.7	2.4
居住年数	5年未満	57.2	25.4	17.1		男性:70歳以上	93.0	5.2	1.7
	5~10年未満	65.4	19.3	15.2		女性:20歳代	41.7	25.0	33.3
	10~20年未満	79.9	13.1	6.8		女性:30歳代	64.5	18.8	16.3
	20年以上	82.8	8.5	8.4		女性:40歳代	83.7	11.3	4.5
						女性:50歳代	87.6	6.4	4.8
近所づきあいの程度	毎日でもお互いに家を行き来する	83.7	12.2	4.1	職業別	農林漁業	96.2	1.3	2.5
	ときどき家を訪問する	92.8	2.8	4.4		自営業	84.4	12.7	2.5
	会えば世間話をする	89.0	6.0	4.4		給与所得者(常勤)	70.5	15.1	14.0
	会えばあいさつする	68.4	17.4	14.0		パートアルバイト	70.6	15.7	13.6
						学生	38.8	24.5	36.7
	つきあいはない	30.6	41.2	28.2		専業主婦(夫)	81.8	8.9	8.6
						無職	82.6	12.0	5.3
全体	76.1	13.3	10.4						

「持ち家・一戸建て」が84.9%と高く、「賃貸住宅・アパート、マンション」では45.5%と、半分以下になる。「加入していない」割合では、「賃貸住宅・アパート、マンション」が34.8%と最も高い。

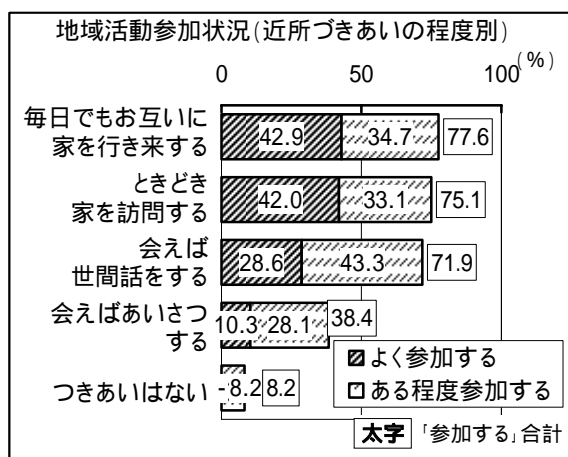
また、居住年数では、年数が長くなるほど加入率は高くなっている。

近所づきあいの程度別で加入率をみると、「毎日でもお互いに家を行き来する」83.7%、「ときどき家を訪問する」92.8%、「会えば世間話をする」89.0%までは高いが、「会えばあいさつする」68.4%で20ポイントの減少をみている。「つきあいはない」では、

「加入している」30.6%、「加入していない」41.2%と逆転している。

次に、近所づきあいの程度別に地域活動への参加状況を試みる。

地域活動への参加状況で「よく参加する」と答えた人をみると、ここでも、「会えば世間話をする」(28.6%;「ある程度参加する」を合計すると71.9%)と「会えばあいさつする」(10.3%;同38.4%)の間に「断絶」が見いだされる。このことから、近隣関係と地域活動参加との関連がうかがわれる。



このことは、自治会の問題は「近隣関係」のあり方の反映であり、自治会の活性化において、豊かな近隣関係の構築が重要であることを示している。

久留米市でも自治会や校区単位の行事は盛んに行われているが、それを支えているのは、身近な隣組や、いわゆる向う三軒両隣の近隣関係である。例えば、一人暮らしの高齢者や、通学中の子どもへの声かけ・見守りのような、安全で安心できる生活空間の維持など、日常的で目に見えるかたちの取り組みがあれば、「つきあいはない」と答えた人に、近所づ

きあいの「必要性」、ひいては自治会の「必要性」を具体的に提示できるであろう。自治会の活性化には、こうした目に見える日常的な取り組みも課題であるといえるのではないだろうか。

30 歳代と 60 歳代で、近所づきあいの程度に男女間で差が見られる

近所づきあいの程度を尋ねた結果をみてみよう^[31 ページ・問4]。全体では、「会えば世間話をする」以上の深いつきあいをしている人は合計で 43.5%となっている。

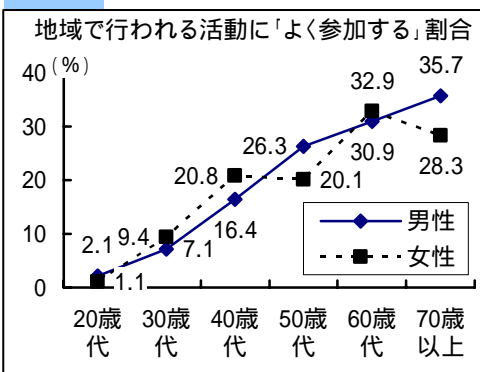
性別・年齢別に「会えば世間話をする」以上の合計値の推移をみると、20 歳代、40 歳代、50 歳代では男女差はほとんど変わらない。それが、30 歳代、60 歳代では、約 17 ポイントという大きな差が表れている^[31 ページ・図 2-5]。30 歳代の差異は、一因として、女性の「子育て」を通じた近隣関係が形成されたからとも考えられる。重要な問題は、60 歳代の男女差の背景であり、50 歳代では男女差がみられないのに、60 歳代になったら大きな差が生まれる点である。

近年、「2007 年問題」という言葉が生まれたように、「団塊の世代」の、特に男性の社会参画や地域デビューが全国的に大きな話題となっているが、久留米市の調査結果では、この世代の男性は女性に比べ、近隣関係の形成が遅れているようである。であるならば、60 歳代女性の「豊かな近隣関係」がどのようにして形成されているか、それを明らかにすることが高齢期に向かう男性の社会関係を豊かにするカギとなる。

「団塊の世代」の男性が社会参加に向かうために

これまで実施されてきた久留米市民意識調査では、生涯学習活動、文化芸術活動への参加状況は 60 歳代女性が中心になっている知見が得られている。このことが、60 歳代女性の「豊かな近隣関係」の形成に寄与していると思われる。

これに対し、一般的な「60 歳代男性」像は、退職にともない家庭の中に閉じこもって「テレビ漬け」の生活を送る、というものである。こうした 60 歳代男性が社会参加に向かうためには、彼らの興味や関心を惹く行事などをきっかけとして顔見知りになることから始め、まずは「家庭から近隣へ」、そして「近隣から地域へ」という「一歩踏み出す」プロセスをどう作っていくかが課題である。先ほどみたように、「豊かな近隣関係」が自治会への加入率、地域活動への参加状況と重要な関連を持っていることを考えると、「先ず近所付き合いから始めよ。」ということになる。



久留米市の調査結果では、自治会などの地域活動に「よく参加する」と答えた男性を年齢別でみると、40 歳代では 16.4% に対し 50 歳代で 26.3%と 10 ポイントもの上昇をみ、60 歳代 30.9%、70 歳以上 35.7%と確実に増加する。女性は、50 歳代 20.1%、60 歳代 32.9%と上昇するが、70 歳以上 28.3%と減少に転じる。男性 50 歳代の「よく参加する」の一定の高さは、地域活動を進めるうえで、久留米市の貴重な財産といえよう。

また、60 歳代の男女差に注目してみると、近所づきあいの

程度では大きな差異があるにもかかわらず、地域活動へ「よく参加する」割合は拮抗している。しかしながら、先に指摘しておいたように、地域の連帯感が薄れていく中、重要であるのは、校区単位や自治会単位の地域活動を支える身近な隣組などの「豊かな近隣関係」の構築である。久留米市の60歳代男性は、近所づきあいの程度のわりに、地域活動によく参加しており、70歳代になっても、地域活動の中心的な担い手となっている。こうした男性が、より豊かな近隣関係を構築できれば、今後の自治会活動において、非常に大きな役割を果たすものと思われる。

さて、一般的な「60歳代男性」像は、「会社人間」という言葉が示すように、企業中心の生き方が優先され、退職後もその価値観を強く持っている。また、地域活動の経験の不足もあり、近隣や地域と関わるためのコミュニケーション・スキルもあまりない。現在60歳代を迎えている最中である「団塊の世代」には、既に失われた「会社（所属）価値」にとらわれるのではなく、家庭や地域優先の価値観への意識改革を促すプログラムが必要であろう。また、上司や部下（上下の関係）ではなく、地域の仲間として関わるスキルの習得も必要となる。それらを提供する機会としては、人づくりに着目した地域活動の場も考えられる。

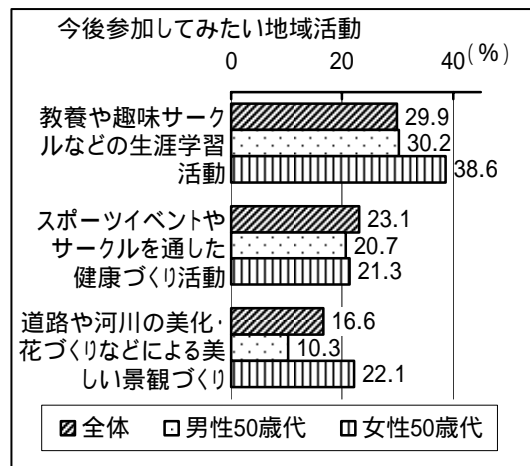
久留米市では、現在、自治会と校区公民館を母体とした総合的な校区まちづくり組織の整備が進んでいる。これからは、自治会も校区まちづくり組織の一員として、校区活動によって支えられてきたコミュニティを生かし、これからの人づくりをどうするか、積極的に考えていくことが必要である。

その方策として、男性の関心を引き出すプログラムづくりが求められているといえよう。

地域活動の中で、今後参加してみたいものの第1位は「教養や趣味サークルなどの生涯学習活動」であり、第2位は「スポーツイベントやサークルを通じた健康づくり活動」である。

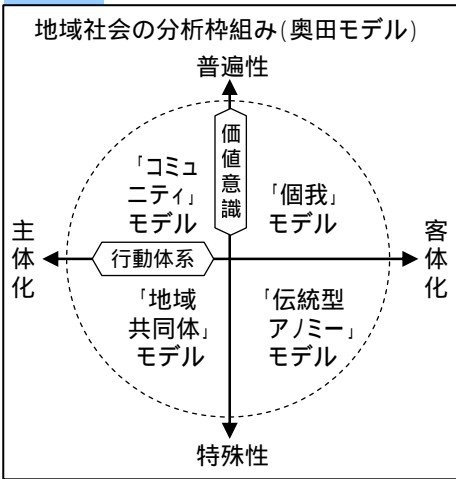
このことから、男性の関心を引き出すきっかけとして、「教養」「趣味」サークルへの参加を呼びかけることから始めてはどうだろう。そうして顔見知りを増やし、少しずつ地域の実情を知っていく中で、スポーツイベントなどの企画や運営に関わってもらうなどして、男性の関心を「家庭」から「近隣」へ、「近隣」から「地域」へと導いていくことが肝要である。

「人間は実際に体験しないと変わらない」、こうしたスキルや知識を身に着ける機会の提供の積み重ねによって、「市民自らが進めるまちづくり活動の振興」のすそ野の拡大がはかられる。



久留米市の意識特性を「自治会活動」にどう結びつけていけるかがカギ

地域生活についての考え方（「コミュニティ意識」）を尋ねた質問は、都市社会学者、奥田道大が提案したことから「奥田モデル」と呼ばれているものを参考にした（奥田『現代コミュニティ論』NHK学園）。地域に住む住民が、どのような意識や価値観を持ち、



どのような行動や態度を示すかで、地域の社会的状況を把握しようとするものである。すなわち、タテの軸は価値観に関わる「普遍性・特殊性」、ヨコの軸は行動に関わる「主体性・客体性」を組み合わせて、4つの地域社会モデルを図式化したものである。このなかで比率が高い「地域共同体」モデルと「コミュニティ」モデルについて説明しておこう。

「地域共同体」モデルも、「コミュニティ」モデルも、ともに地域生活に主体的に関わろうとするタイプである。「地域共同体」モデルは、地縁的結合と一体感情、外部に対する閉鎖性が特徴となっている。これに対し、「コミュニティ」モデルは、選択意思

として居住し続けるという特徴を持ち、住民要求も、個別的利益ではなく住民全体の利益、住民生活の改善をめざして行われる。もちろん、この4つのモデルはそのまま実態を反映したものではなく、奥田が言うように「現実は、ここでの各モデルが交錯し合う多重的なもの」である。

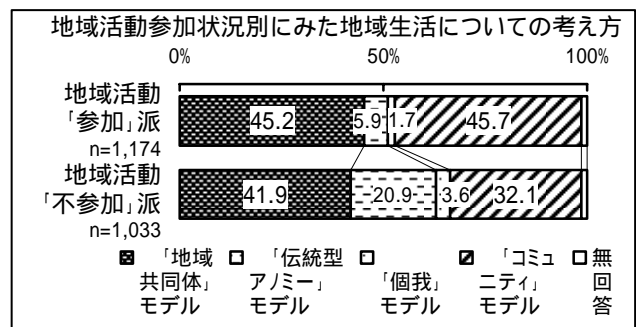
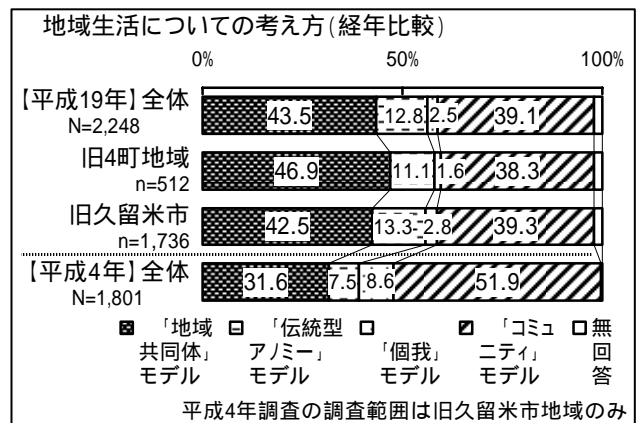
さて、久留米市の結果は、「地域共同体」モデルが43.5%、「コミュニティ」モデルが39.1%と拮抗したかたちである。平成4年の調査では、「コミュニティ」モデル51.9%、「地域共同体」モデル31.6%という結果であったが、今回は逆転した。

次に、地域生活についての考え方を、地域活動への参加状況との関連でみると、「よく参加する」と「ある程度参加する」を合計した「参加」派は、「地域共同体」モデルでは54.3%、「コミュニティ」モデルでは61.1%となっているが〔38ページ・図2-12〕、地域活動に「あまり参加しない」、「まったく参加しない」と答えた人の中にも、「地域共同体」モデルが41.9%、「コミュニティ」モデルが32.1%を占め、「不参加」派の中にも、地域活動に主体的にかかわろうとするタイプが、かなり存在していることがわかる。

また、自治会未加入者のなかにも、「加入したい」、「必要があれば加入したい」と答えた人の合計が31.5%を占めている〔30ページ・問5付問3〕。

これらのことから、久留米市においては、現在は地域活動に関わっていない人たちの中にも、地域活動に理解を示すと思われる層が存在しており、今以上に自治会が活性化させる素地が十分にあるといえるだろう。

自治会は、豊かな近隣関係に根ざした活動によって、地域の課題解決に取り組み、明るい安全・安心のまちづくりを目指す組織である。こうした自治会活動の意義や重要性を、



目に見えるかたちで提示することができれば、「不参加」派を「参加」派へ、「未加入者」を「加入者」へ転換させることが可能であるかもしれない。

また、自治会未加入者のなかには、「加入などの誘いを受けたことがない」という人や「自治会の情報が伝わってこない」という人も多く〔29 ページ・問5付問2〕、お祭りなどの行事に参加してみたい、という人も3割を超えている〔41 ページ・図2-15〕。

久留米市が進める校区まちづくり組織の基盤であり要である自治会を活性化することは、これからの地域におけるまちづくりにとって重要である。

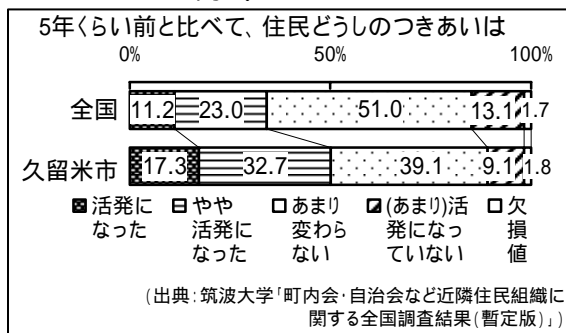
今回の調査結果から、まず、自治会をはじめとする地域活動の意義や重要性を理解してもらうため、自治会などの地域活動について継続的に情報を提供することや、自治会への加入、地域活動への参加などに向けた継続的な働きかけが必要であることが指摘できる。



自治会活動の現状と課題について、2つの調査結果を紹介しよう。

1つは、全国の自治会 33,438 を対象に、平成 19 年1月に実施された筑波大学の調査である。同調査では、久留米市の 110 自治会が対象、おおむね自治会長が回答したものであるが、全国の傾向と比較してみたい。

まず、地域における住民同士のつきあいは5年前と比べて活発になったかという質問では、「活発になった」17.3% (全国 11.2%)、「やや活発になった」32.7% (同 23.0%)と、合計した活発になったと評価する自治会長は全国の 34.2%に対し、久留米市は 50.0%ときわめて高い。



次に、活動内容では、全国と比べ久留米市では「まちづくりやまちおこし」68.2% (36.7%)、「交通安全の指導」74.5% (53.0%)などで大きな差がみられる。なお、「慶弔の世話」は全国 67.6%に対し久留米市は 57.3%と低くなっている。

自治会活動への参加程度を尋ねた質問で「8割以上」の参加があるという回答は、「清掃・美化・リサ

イクル活動」50.9%、「総会」30.9%などで高くなっている。

最後に、自治会活動に関することで「円滑に行われているか」を尋ねた質問をみてみよう。「円滑である」という回答は、「集会や行事を行う施設の確保」32.7%、「役員の引き継ぎ」30.9%で高く、「世代間の交流」10.0%、「加入世帯の活動への参加」14.5%では低くなっている。

自治会の活動内容 (国との差が大きい項目)	全国 (%)	久留米市 (%)	差 (%)
まちづくりやまちおこし	36.7	68.2	31.5
交通安全の指導	53.0	74.5	21.5
青少年の健全育成の支援	52.2	71.8	19.6
犯罪・非行の防止	51.8	69.1	17.3
スポーツイベントや文化活動	64.0	80.0	16.0
慶弔の世話	67.6	57.3	-10.3

各種自治会活動において、8割以上の世帯が参加している割合 (%)

活動内容(主な項目)	全国 (%)	久留米市 (%)	差 (%)
清掃・美化・リサイクル活動	42.6	50.9	8.3
総会	33.1	30.9	-2.2
地域のお祭り	22.6	19.1	-3.5
スポーツ・レクリエーション活動	8.4	13.6	5.2
防災訓練	8.6	4.5	-4.1

各種自治会活動において「円滑に行われている」割合 (%)

活動内容(主な項目)	全国 (%)	久留米市 (%)	差 (%)
集会や行事を行う施設の確保	37.5	32.7	-4.8
役員の引きつぎ	36.4	30.9	-5.5
加入世帯の活動への参加	13.3	14.5	1.2
世代間の交流	10.1	10.0	-0.1

(出典:筑波大学「町内会・自治会など近隣住民組織に関する全国調査結果(暫定版)」)

2つ目は、福岡市が平成 18 年 7月に自治会・町内会長(2,245 名)を対象に実施した「自治会・町内会アンケート調査」である。久留米市でも「賃貸住宅・アパート、マンション」の加入率が低いことは指摘しておいたが、福岡市では集合住宅はもっと多い。こうした現状に対し、自治会長はどのように考えているのだろうか。

調査結果では、未加入世帯の半数近くは「ワンルームタイプの集合住宅」で、約 3 分の 1 が「ファミリータイプの賃貸住宅」となっている。また、「1世帯も加入していない集合住宅がある」と答えた自治会は 28.9%と、個別世帯単位ではなく集合住宅単位での非加入が大きな問題になっている現状が明らかである。

福岡市全体	28.9	南区	26.7
東区	26.8	城南区	35.8
博多区	29.7	早良区	28.1
中央区	31.4	西区	26.1

(出典:福岡市「自治会・町内会アンケート調査」)

「加入を促進するために行っていること」をみると、「転入者に加入の案内をしている」38.8%、「未加入世帯を役員が戸別に訪問している」17.7%、「未加入世帯にちらしを配布している」11.3%となっている。「自治会活動の従事時間」は、1カ月当たり「6～10日」が 33.0%、「1～5日」が 28.4%という現状である。

2つの調査は、市民と行政との協働という時代を迎えて、従来の自治会・町内会がどのようにしてその新しい役割を果たしていくか、その転換期にあることを示している。

そうした新たな課題に取り組むための突破口として、奥田モデルの表現を借りれば、「地域共同体」モデルと「コミュニティ」モデルとの可能性が生まれている。「地域共同体」モデルは「地縁的結合」と「一体感」という内部資源を重視する推進手法であり、「コミュニティ」モデルは地域住民が主体的な関わりをもちながら、開放的に外部資源も選択肢として活用する手法である。

ここで紹介した2つの調査のうち、前者の筑波大学の研究グループは、自治会の新しい役割を「新しいガバナンス(経営)」や「もう一つの公共」を担うNPO等の市民活動団体との横断的な「連携」に求めようとする開放的な「コミュニティ」志向の立場であり、もう一方の福岡市は、いまだ 90%を超える高い加入率を持つという「強み」を生かして、自治会・町内会のマネジメント(運営)能力アップ、役員層のリーダーシップ向上を支援する政策で新しい課題に 대응しようとしている。いわば、旧博多部を中心に形成された「山笠町内会(流れ)」に象徴されるような、「地域共同体」志向の立場であるといえる。

平成 13 年に策定した「久留米市新総合計画」のなかで、「策定の視点」の1つとして「協働を基本視点とした都市づくり」を掲げた。地域活動の停滞、地域の社会関係の衰退など、「市民協働」を取り巻く環境は厳しい。そうしたなか、今後の久留米市の自治会活動、地域活動はどのような基本的な方向で進めるべきか、そのための担い手の育成をどうするか、真剣に検討すべき重大な時期が来ている。

ここで今回の調査結果の中で注目したいのは、性別・年齢別で「コミュニティ意識」をみると、男性の 50 歳代で「地域共同体」モデルが 41.8%、「コミュニティ」モデルが 44.4%と、男性のなかでは唯一「コミュニティ」モデルの方が高いことである。

	「地域共同体」モデル		「コミュニティ」モデル	
	男性	女性	男性	女性
20歳代	35.0	34.4	33.6	36.7
30歳代	41.7	39.2	33.3	35.9
40歳代	41.8	40.3	38.2	42.1
50歳代	41.8	45.0	44.4	41.0
60歳代	46.9	54.2	43.0	39.6
70歳以上	47.8	57.5	40.0	35.4

「団塊の世代の社会参画」がテーマの1つとなった今回の調査であるが、男性 50 歳代の意識特性を「協働のまちづくり」にどう結びつけていけるか、そのプロセスづくりがひとつのカギになっている。